

## 徳山試験地の檜皮（ひわだ）林

徳山試験地は、1931年に徳山町遠石の町有保安林 36.2ha を徳山町より寄付を受け、農学部砂防演習地として設置された。徳山海軍要港部からの要請により、1942年に徳山市笹葉ヶ丘に換地移転（20.0ha）して農学部附属演習林の試験地となった。1966年に徳山市の都市計画に伴い、現在地に再度移転した。国道用地への所管換があり現在の面積は 41.9ha である。旧試験地は周南緑地公園（西緑地）の「万葉の森」として市民の憩いの場となっている。所管換え以前からのスギ、ヒノキ造林地が 11.82ha あり、このうち高齢ヒノキ林（60～85 年生）では 2004-05 年に檜皮（荒皮）がはじめて採取され、それ以後、檜皮生産林として維持管理してきた。2008 年 3 月には、文化財補修のための資材確保を目的として文化庁より「ふるさと文化財の森 檜皮の森」に指定されている。これは、檜皮などの文化財修復用資材や技術者が不足するという近年の社会的背景によって、文化庁による資材確保のための調査・研究に協力しているものである。

2015 年度からは、檜皮（黒皮）の生産が、全国社寺等屋根工事技術保存会との共同で実施され、檜皮を採取する原皮師（もとかわし）育成のための技術研修も行われている（写真 1,2,3）。また、檜皮の採取がヒノキ材の質に及ぼす影響を評価する研究も行われ、檜皮採取が肥大成長に及ぼす影響はほとんどないという結果が得られている。

檜皮の生産より、徳山試験地は収入を得ることができている。2015～2017 年の 3 年間では、合計約 5,600kg の檜皮が生産されたが、保存会によって 1kg あたり 170 円で買い取られ、約 95 万円の収入となった。2018 年度にも生産が予定されており、今後ほぼ 10 年ごとに 100 万円程度の収入が期待される。この檜皮林は、大学教育や地元周南市との連携講座などで利用しており、また、京都大学の全学共通科目である ILAS セミナーの受講生や地元中学生の森林施業の実習の場としても活用している。2015 年からは、原皮師による檜皮採取作業を連携講座の参加者に見学してもらっている。木ベラとぶり縄（写真 2）だけを使い、10m 以上の高さにまで上って檜皮をみるみるうちに剥いていく作業には、参加者から驚きの声が上がっている。この原皮師による檜皮採取の様子は、京都大学のオープン・コース・ウェア（<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/opencourse/166/>）で視聴することができる。



写真 1. 技能検定風景



写真 3. 檜皮を束ねて 75cm に切り揃える。



写真 2. ぶり縄